

或る郷の物語（下）

その郷で、自然界の感動的なシーンをつぶさにした。

リゾート施設の建設が終盤に近付いた満月の夜。まだ開業を控えて、準備スタッフが行き交う広々とした一階ロビーの床に一面、無数の赤い手の蟹が海側に這って行く異様なシーンが展開された。ざわざわとロビー全体に静かな音が響く。

僕は、事務室奥の自室にあった双眼鏡を携えて彼らを追って行った。

赤手蟹

まさに、「山の神」の祠の前に居た、あの蟹が大挙したのだ。

双眼鏡の中でとらえた様子は、自然界に生きる命の不思議だった。満月の宵、まばゆいほどの白波が立つ浜際で、海に向かって皆一斉に打ち震えながら、卵なのだろうか、放っている。神聖な儀式を目の当たりにする様だった。

幼生を放っていたのか！鳥肌が立った。

眼の前に忽然と現れて自然の営みを展開する一連の姿に、僕は哀しいほどの命のドラマを観ているようだった。

彼らは、赤手蟹という。

調べると、海岸の河口近くの湿地や海に近い森林に生息する陸棲のカニで、毎年7～9月頃の満月や新月の大潮の夜に、卵から孵化したしたばかりのゾエアと呼ばれる幼生を一斉に海に放つとある。

眼前の無数の蟹は当然だろうが、全て雌の筈である。

この時、一方の雄（オス）はどうしていたのだろうか？大分時間が経って素朴に興味を持った。

そのオスの蟹、調べると、

赤手蟹の雌が海辺で幼生を解き放つ「放仔（ほうし）」を行っている間、オスは「海への大移動」には加わらず、陸上の生息地（森や茂みなど）に留まっているという。

オスは雌に精子を渡すと、その後の「卵を抱えて育てる（抱卵）」や「海へ運ぶ」というステップには関与しない。そのため、雌が命がけで海岸へ向かう大移動の時期には、オスは生活圏である森や茂みに居る。

したがって放仔は雌の単独行動で、しかも命がけの旅となる。お腹に幼生を抱えて海に放すために、山や森から海岸までの長い距離を移動。この夜間の移動中、雌は天敵（タヌキ、ゴイサギ等）や、道路の横断という危険にさらされる。

そして、無事辿り着いた雌が波打ち際で体を激しく振るわせ、孵化したばかりの幼生（ゾエア幼生）を海へ放つ。この儀式のような行動を、オスが付き添って見守るといったことはない。

施設の開設準備やオープンで忙殺され、探さず仕舞いにしてしまったが、こんなところで彼らに会うとは思ってもみなかった。我々人間の開発行為によって彼らの住処を奪い、追い出してしまったことになる。この郷を思い出すたび、ずっと心に引っかかるようになった。

そして、その浜の端にある岩礁の洞窟の地下で、女神像が出土した。

女神像の出土

まるで火山が海に向かって噴き出した後のような地下壕が残されていた。見ると洞窟内部はノミで削ったような細かなギザギザとした跡が残って極めて複雑な様相を呈している。

伊豆石の採掘場跡という。石は江戸時代後期から海上輸送で江戸に運ばれていたようだ。

その洞窟内に背丈数十センチの女神像が埋もれていた。

リゾート施設建設中の業者が見つけて掘り起こしたのだった。女神像は、そこで作業に携わる関係者の安全と海上輸送の平穩を願う人々によって祭祀されたという。

浜辺で赤手蟹の放仔。その浜の端にある岩礁から女神像の出
土・・・因縁を感じた。